

[研究論文]

大学における専門科目としての「演技の授業」と 「ジェンダー」

—隠れたカリキュラムを考える—

Gender Issues in Acting Classes at the University Level

—Looking at the Hidden Curriculum in Class—

松村悠実子

Yumiko Matsumura

〈抄 録〉

本論はこれまで日本の大学における専門実技科目としての「演技」の授業において、まだ着目されていない授業における「ジェンダー」という視点から考察を行う。「隠れたカリキュラム」や「大学教育以前の教育機関」の先行研究をもとに、「演技の授業」独特の問題及び課題を明らかにし、どのような授業改善の提案ができるかを検討していく。

キーワード：ジェンダー、隠れたカリキュラム、演技の授業、専門科目

Abstract

This essay will look at gender issues in acting classes at the university level which is not yet discussed in Japan, combining previous research results in both hidden curriculum and gender issues at the school level, and then revealing specific problems and issues in acting classes. Furthermore, it will also mention about how to challenge the issues in order to make the classes better.

Keywords: gender, hidden curriculum, acting class, specialized subject

1. 目的及びこれまでの研究の経緯

本論はこれまで日本の大学における専門実技科目としての「演技」の授業¹⁾において、まだ着目されていない「隠れたカリキュラム」について焦点を当て、「ジェンダー」という視点から「演技の授業」独特の問題及び課題を明らかにし考察を行う。そしてそれをもとに、どのような授業改善の提案ができるかを検討していく。

これまでの研究の経緯及び今回の研究の発端は、筆者自身が大学で専門科目としての演技の授業を

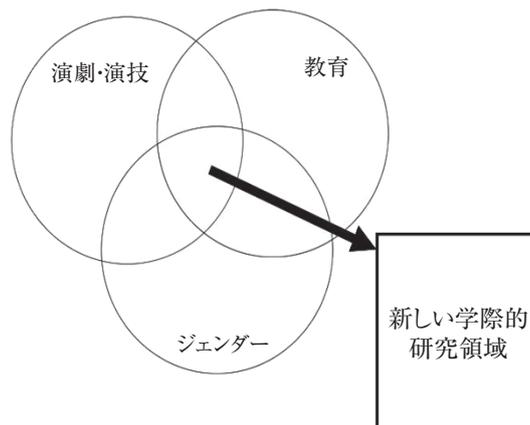


図 本研究の学問領域

担当した経験の中で生じた、学生達の演技の仕方についての以下の様な問いである。

- ・学生達は、本当に思い切り体を動かすことができているのだろうか。
- ・表現の仕方に規制があるのではないかと。だとすると、何故なのだろうか。
- ・教員の指示以外に、何か暗黙の「行動規範」があるのではないかと。

以上の問いをもとに、これまでの研究経緯として、拙論²⁾において、学生達は日常生活での「ジェンダー」という「キャラ」を背負ったまま、演劇の登場人物（キャラクター）を演じているという、いわば、演技の二重構造があるのではないかとという仮説を立てた。その検討の中で「女性」という「ジェンダー」には、女性性とされる「かわいい」ふるまいが求められており、演技の授業中でもこの「ジェンダー」規範の中で演じているのではないかとということを論じた。またその理由として大学に入学する以前の学校教育の中で、「ジェンダーによって求められるふるまい」があったことや、カリキュラム上、又はカリキュラム外、つまり「隠れたカリキュラム」での教員の指導や学校制度のしきたりの中で「ジェンダー（性別）によって異なった教育を受けてきた」という背景が影響しているのではないかと、教育的側面に由来する部分があることを明らかにした。次の拙論³⁾では、大学での演劇（演技）の教育、及び授業内において、ジェンダーについてどのような試みがあるのかを検討したが、筆者が探した限りでは日本の大学における演劇（演技）の授業におけるジェンダーについての研究はまだ例がないようであった。

以上のことをふまえ、本論では演技の授業における「隠れたカリキュラム」の実体を洗い出し、新しく「ジェンダー」の視点を含んだ「演技の授業」について考えていく。この研究の学問的領域の位置づけは図が示す通りである。「演劇・演技」「教育」「ジェンダー」これら三つの分野はそれら単体、及び二つが重なった領域はこれまで研究されているが、今回の研究はこの三つが重なり合った複合領域で、新しい学際的研究領域にあたると思う。

2. 研究方法

今回の研究は、「演劇・演技」「教育」「ジェンダー」をキーワードとした先行研究の分析を行い、演技の授業における「隠れたカリキュラム」に応用し、議論を行う。また今回の研究を行うにあたり、実際に演技の授業を担当している教員にアンケート調査⁴⁾、及びインタビュー調査⁵⁾を実施、その結果もふまえ、議論を展開する。

3. 演劇（演技）教育におけるジェンダー的視点の導入—その意義と展望

演技の授業にジェンダーの視点を導入する意義はそもそもなんだろうか。もちろん様々な演劇があり、一概にそうだともちろん断定はできないが、演劇、特に脚本が存在し、人間関係が描かれる作品の中には、男女を中心とした性別役割が存在し、性やジェンダーからは逃れられないという専門性がある。その中には性差別的発言やステレオタイプ化された男女の描かれ方が見られるのも事実である。では、一体、演劇教育において「ジェンダー」を問う意義があるのか否かという点について、以下の三点を根拠として挙げてみたい。

第一に、まずこの度は、前提としてその是非を問う、つまり「ジェンダーをなくそう」というのではなく、着目すべきと考えるのは、「演劇はこういうものだから」「戯曲はこう書いてあるから」と、そういった「専門性」を盾に、教室の中で指導をする上で見過ごされてきたジェンダーバイアスについて、問うことである。「授業」において「ジェンダーバイアス」がないかどうか、またあるとするならばどの様なことなのか、更にはジェンダーや性を扱うが故に、教員としてどの様なことを考慮していくべきか、また教員自身が気づいていないバイアスが存在しているのではないかという視点に立つことである⁶⁾。

第二に、「大学教育」という枠組みにおいて、授業の中のジェンダーバイアスを見直すことの教育的意義についてである。単に「差別やハラスメントをなくそう」というだけでなく（もちろん必要なことだが）「ジェンダー的視点」で考察するという事は、学士力の育成にもつながるという点である。大学における演劇教育の目的は、単純に上手にセリフを言えて、演出家の望むように演技をすることだけではないだろう。文部科学省が挙げている各専攻分野を通じて培う「学士力」中の一つには「汎用的技能」として、「論理的思考力（情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる）」及び「問題解決力（問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる）」⁷⁾が挙げられている。つまり、演劇の専門知識や技術だけでなく、この様な汎用的能力も身につける必要がある。「ジェンダーの視点」を取り入れ物事を新たな角度から見直すことはこの様な能力の育成につながると思う。

第三に、実は、ジェンダーフリーの考え方と、「演劇」の考え方には共通点があることを指摘する。まず、「学校でのジェンダーフリー教育」に関して稲邑（2001）⁸⁾は、以下の様に述べている。

学校でジェンダーフリーを実現していくときに気になる点が2つある。1つは日本でジェンダーフリー教育を語る時、性差別の問題だけが取り上げられ、それ以外の階級、人種、民族、障害、年齢、性的指向などをめぐるさまざまな差別が視野に入りにくいこと。〈中略〉性差別だけでなく、あらゆる差別に敏感であることをジェンダーフリーの前提にすることが必要なのではないかと思われる⁹⁾。

ここで「演劇とは何か」という大きな枠組みで考えたとき、もちろん、一概にすべてそうだとはいえないが、「演劇」そのものもこの様な命題に取り組み、社会に発信し、問題提起をするものではないだろうか。つまり、「演劇」とは社会に対して様々な角度からの視点や、そこに存在する人々を描き出し、メッセージを発信していくものであるともいえる。こういった点で、ジェンダーフリーの視点と演劇との共通点を見出すことができるのではないかと考える。

4. 「教育におけるジェンダー」

議論を始めるにあたり、まず演技の授業に応用するための「教育におけるジェンダー」の先行研究及び「隠れたカリキュラム」について整理しておく。

4-1. 「教育におけるジェンダー」の先行研究及び取り組み

日本の教育において「ジェンダー」という視点が導入されてきたのは、80年代といわれている。それ以降、様々な取り組みが学校現場で行われてきた。つまり、今、演技の授業を担当している教員達が80年代以前に学生であったとすれば、自分達が受けていた授業や学校生活における「ジェンダー」のとらえ方や教わり方、また考え方が現在の学生達が受けてきた教育とは違いがある、ということである。よって、目の前にいる学生達を理解するには彼らが今までどの様な教育を受けてきたのか、また今、教育現場ではどの様なことが唱えられているのかをあらためて見ていくことが必要であるということをもまず指摘する。

教育の場では「ジェンダーフリー教育」という言葉に表されている様に、「ジェンダー」での差別(ジェンダーバイアス)をなくしていこうという試みがなされてきた。またその流れの中で、極端にジェンダーを排除したり、「男性基準」に合わせて「フリー」にし、結局は女性や女子にとって不利な状況を生み出すのではなく、「ジェンダーセンシティブ」つまり「ジェンダーによる差別に対して意識すること」が大切なのではないかという意味の言葉も存在する。これらの言葉の定義や取り組みに関して議論することは本題から逸するので今回は割愛するが、この様に大学以前の教育におけるジェンダーに関する取り組み例や研究を演技の「教育」といった部分に焦点を当てて考察することにより、今まで見えなかった、又は見過ごされてきた演技の授業におけるジェンダーバイアスについて、初めて気づくことができるのではないかと考える。

4-2. 「隠れたカリキュラム」とは

教育におけるジェンダーの問題を考える際のキーワードとして「隠れたカリキュラム」がある。「隠れたカリキュラム」とは、学校の中で公式なカリキュラムには無いが、加藤(2005)¹⁰⁾曰く、男子には主体性と積極性、女子には自己抑制や従順さを説くなどのジェンダーバイアスなど、「暗黙のうちに伝えられる価値や規範」で、単にルールだけではなく、「子供達のものの見方や生き方についての基本的な態度に影響する」としている。具体例として、笠原(2003)¹¹⁾が述べている様な、名簿は男子が先、「男子は理系、女子は文系」といった進路指導、男子の発言を求めることが多い教員の対応、選手は男子、マネージャーは女子などが挙げられ、「隠れたカリキュラム」として存在するジェンダーの価値や態度、規範は、子供達に暗黙のメッセージを伝えている。

5. 考察①—演劇(演技)教育と「隠れたカリキュラム」

5-1. 学生達の身体と隠れたカリキュラム—「体育」の授業における「隠れたカリキュラム」との対応—

では具体例を挙げ、演技の授業に潜む隠れたカリキュラムを考える。まず「身体」をキーワードに大学以前の教育における「体育」の授業に関する事柄を参考に考えていく。何故かという、熊谷(2007)¹²⁾は「演技の授業」は、既存の科目の中で何に一番近いかという、「体育」であると述べている。また筆者が行った演技の授業、特に体作りや基礎レッスンといった場合には稽古着に着替え、裸足で大きな声を出し、走り回れることが前提としてあり、そういった「身体」を中心とした授業内容とい

う点においては体育に近いものがあった。井谷 (2015)¹³⁾ は、「体育・保健体育のカリキュラムにおいて制度上の男女平等が達成されたのは、1989年の学習指導要領改訂からである」が、「実際に計画され経験されるカリキュラムには、依然として男女の差異が存続している」¹⁴⁾ とし、「高校時代の体育授業で経験した運動領域について、大学生に尋ねた調査」より、「男子学生の多くは武道を学習しているがダンスについては経験が少なく選択肢さへなかったという答えが少なくない。一方、女子学生では武道とダンスの経験が逆転する。」¹⁵⁾ としている。つまり選択肢や経験も、性別によって異なっていたという結果である。もし、学生達がこの様な学習経験及び意識で大学に入学し、演技の授業に参加した場合、突然男女共修の大学の演技の教室で「ダンスを踊りなさい」「殺陣をやります」といったときに、この様な「性別によっての経験値が違う」ということを無視して、「やはり男子はダンスが下手」「やはり女子は戦えない」と教員、そして学生自身も判断していないだろうか。又は、そもそも教員側の意識に、同じく隠れたカリキュラムがあり授業内で「女子はダンス」「男子は殺陣」と単純に性別で分けた配役や稽古内容にするなど、「そういうものだから」という「ジェンダー規範」の押し付けをしていないだろうか。もちろん、演出上、性別で分けた方がいい場合もあるだろう。ここで大切なのは、教員自身が無意識に持つジェンダーバイアスに「気づけるかどうか」である。この「気づき」からこれまで無意識の規範により、学生自身が演じることを避けていた、又は教員側が、演じさせてなかった、又は求めていなかった演技に出会えるチャンスでもあり、演技の幅が広がる可能性があるのではないか。こういった学生達の「学びのチャンス」を奪っていないか、他の方法や分け方がないかと授業や稽古のやり方を見直し、偏りのない学習経験を提供できないか、と教員が「問い直す」ことで改善が期待できる。

また体育の授業において指摘されている「ダブルスタンダード」、つまり「男女で達成基準が大きく異なることが多い」¹⁶⁾ という点、概して男子の方が体育において女子より求められる基準が高いという点も演技の授業において当てはめて考えることができる。教員側がこの様なダブルスタンダードを持ち合わせている場合、無意識のうちに男子学生、女子学生の到達目標を「不必要に／必要以上に」又は「意図せず」に変えていないだろうか。本当にその男女の区分けが必要なのか、無意識の「男」「女」の基準が学生の評価につながっていないか評価の際にも教員側が自らを問い直す必要がある。

5-2. 「戯曲」に関する「隠れたカリキュラム」

次に、教材として使用する「戯曲」について考える。まず戯曲はどのような基準で選ばれているだろうか¹⁷⁾。笠原 (2003)¹⁸⁾ によると、教科書におけるジェンダーバイアスについて、例えば歴史教科書の人物は男性に偏り、教科書の挿絵の女性の職業人は登場数が少なく、また種類も限定されているなど、男性中心の視点から作られ、これにより「主人公は男性、女性は脇役」「男性は主体的、女性は受動的」というメッセージを送ることになると述べている¹⁹⁾。また、保育の現場にある絵本にみるジェンダーについての研究²⁰⁾ では、保育室にある絵本は依然として主人公が男である比率が多いということが挙げられており、これは物語の主人公は男の子、女の子は傍観者といった「暗黙のメッセージ」「暗黙のロールモデル」を伝えていることになる。しかし、保育の現場において、「無意識に」絵本を置いた場合この様な結果になった訳であり、つまり「意識」することで、絵本の種類にバラエティーを持たせることは、教員側ができる試みであるとしている。これは戯曲選定の際にも応用して考えることができないだろうか。「一つの授業」というレベルだけでなく「大学生活4年間」の中で、「学生達が出会う戯曲」という大きな枠、つまりカリキュラムとしても考えていく必要がある。「4年間で一度も女性が主役の戯曲に出会わなかった」「4年間で出会った劇作家全員男性だった」「女性の登場人物はステレオタイプの女性像のみだった」「女子だからアンサンブルしかやれなかった」とすると、

暗黙に「主役は男性」「女性はこう描く」「脚本家は男性」「演劇はこういうもの」というメッセージを学生に伝えることにもなる。この様な影響を考慮し、戯曲を教材として選択する際のチェック項目の一つにジェンダーの視点を加え、学生達がジェンダーという視点からも「多様な人物像のある」戯曲に出会える機会を増やすことは可能ではないだろうか。更に、水本（2015）²¹⁾ は、日本語を学ぶ外国人向けの日本語教科書のジェンダーバイアスについて述べており、「日本語教科書は、学習者が日本語学習を通して日本文化や日本人をはじめ日本のさまざまな様相を知る重要な役割を果たす」²²⁾ としている。つまり、「日本語」を学ぶだけでなく、その内容も学習者は学んでいるということだ。これは演技の授業にも「演技の練習・セリフの練習のため」と選ばれた脚本だから「内容は関係ない」のではなく、その内容も学生達は学んでおり、メッセージを読み取っていくと置き換えられる。では、今の時代では、性差別ととらえることのできる戯曲は排除すべきか、といった点について次のように考察する。「歴史教科書の見直し」の事例²³⁾ がある。それは、今まで男性主体の歴史教科書に女性の視点、女性史の研究の反映をしていこうという試みである。例えば、フランス革命において「市民が自由平等を勝ち取った」と伝えられているが、実は女性と男性とでは違ったという様な視点を加えることである。このことを応用して考えるとき、もちろん、先に述べた通り、ジェンダーバランスを考えた戯曲を選定することも解決策の一つであるが、そうでない戯曲を扱うときに、与えられた戯曲をどういった視点から「読むか」が大事であり、解説や議論をしないでただ与えるだけでなく、戯曲の読み方、演出の仕方にジェンダーの視点を加え、何故こういう視点になっているのか、何故こういう描かれ方になっているのかを意識化して、議論し、隠れたメッセージを無視せず、向き合う姿勢が必要だと考える。

5-3. 教員の中に潜む「隠れたカリキュラム」とその対策

これまで述べてきた「隠れたカリキュラム」は「教員側」の意識や心がけで改善できることが示されている。よって、次に「教員」に焦点を当て、何が可能かについて考えていく。

第一に、教員側の「意識改革」について、教員側に「ジェンダーは専門分野ではない」「演技の授業にジェンダーは関係ない」「演技にジェンダーはあってしかるべきだから議論の余地はない」「私は差別をしていない」等の意見が生じるかもしれない。しかしながら、細かく見ていくと、気づかなかった、見えなかった、当たり前だと思っていた、「ジェンダーバイアス」が浮かび上がってくることは今まで述べた通りである。教員一人一人が、問題意識を持つことがまず改善の第一歩といえる。

第二に、「どう変えていけばいいのか」という点においての提案として①授業②実習公演③年間カリキュラム④4年間のカリキュラムと、様々なレベルにおいて「ジェンダーの視点」というチェック項目を追加することである。

第三に、教員が学生と接する上で改善できる「声かけ」「ダメ出し」に関してである。「男らしくない」「女らしくない」といった類のダメ出しで終わるのではなく、また「～らしくない」は差別にあたるからと消極的にその表現を避けるのではなく、求められる演技を「具体的に」学生と議論することで、その戯曲の中の登場人物像で必要とされる「男／女らしさ」を出す「演技」とは何だろうかという演技の細かい分析ができるチャンスに変えていくことを提案する。「男らしく」が求めているのは例えば、「低い、太い声でしゃべり、大股で荒々しく動く」など明確に提示することで、より具体的に理論的な演技指導、演技技術の習得にもつながっていくのではないだろうか²⁴⁾。

第四に、学生達のジェンダーの多様性についての意識・理解である。今、教育の現場において課題とされているのは、男女差別だけでなく、学生達の様々なジェンダーアイデンティティーについての理解促進及びその取り組みである。例えば薬師（2015）²⁵⁾ は「四〇人クラスの場合は、三人くらいは

LGBTの子どもがいるというふうに考えられます²⁶⁾と述べ、更に、LGBTを揶揄する言葉を聞いたことのある児童や、バカにされているような現場に立ち会ったことがある児童は多くいるとある²⁷⁾。これは第三で述べた教員の声かけを見直す点にもつながる。「性」や「身体」を扱う演劇・演技の授業において、男性・女性だけの区分けにおける「ジェンダー」だけではなく、薬師曰く「人の数だけセクシュアリティがあるといっても過言ではありません²⁸⁾」ということ、教員と学生達が共に理解していくことも、求められるだろう。また最近「ジェンダーレス」という言葉を聞くようになった。2015年に発売された『THE PERFECT STYLE BOOK OF ジェンダーレス男子。』²⁹⁾という二十歳前後の「男子」が登場するスタイルブックには、その定義として、「ジェンダーレス男子」とは、『男らしく』じゃなく、『自分らしく』であることをなにより大事にして生きる男子³⁰⁾とある。こういった多様性も含め、もしかすると、教員の思う「男らしさ」、戯曲が描く「男らしさ」、今の学生達が考える「男らしさ」とはイメージや、身体的感覚、表現の仕方は異なるものという認識を持つことも、教員にとっても、学生にとっても演技における新たな気づきと学びへの一歩になるだろう。

6. 考察②—演劇分野におけるジェンダー研究及び取り組みの教育への反映

次に実際に「カリキュラムの反映」という点について考えていく。演劇教育研究におけるジェンダーはまだ日本では語られることは多くはないが、フェミニズム／ジェンダーと演劇を結び付けた研究は演劇研究全体としてはおこなわれている。演劇に潜む女性排除、女性の不在、ステレオタイプ、男性目線の女性の表象、更にはフェミニズム演劇、レズビアン演劇についての議論も展開されている³¹⁾。こういった試みと教育現場との意識的な交わり、フェミニズムと演劇（Feminism Theatre）の研究分野を日本の大学での演劇教育においても紹介し、授業内容やカリキュラムに取り入れることも提案として挙げられる。

例えば、イギリスの演劇分野を持つ大学には、演劇をジェンダーの視点からとらえた科目がある大学が存在することが、ホームページ上で確認できた。例えば、University of Warwickでは「Performing Gender and Sexuality」³²⁾、Gold Smith University of Londonでは「Women, Feminism & Playwrighting」 「Gendered Performance」³³⁾、Queen Mary University of Londonでは「Performance, Sexuality, Identity」³⁴⁾など、科目名に「ジェンダー、性、フェミニズム」と「演劇関連用語」とが組み合わせられたものがあることがわかる。日本における演劇教育のカリキュラム編成、指導内容、授業を吟味する際にこの様な例も参考にできる。またインターネット上の「the guardian」に「Young women play leading roles in life — so why not on stage? (筆者訳：若い女性は人生では主役をはるのに、何故舞台上ではなれないの?)」³⁵⁾という記事がある。これは大学ではなくユースシアターの話ではあるが、英国でも参加者は女子が多いのに、戯曲の女性役の数少なさ、そしてそれのみならず、質の欠如について述べられている。つまり、女の子達の持つ想像性、知性、多様性、ユーモア、そして才能を活かせる役がないとしている。更に興味深い指摘として、「未来の演劇」に、舞台上で女性達が活躍できる戯曲が増えて欲しいと思うのであれば、今、若い世代にこそその機会を与える必要があるとしている。これは、大学で演劇を専門として教育する、つまり未来の演劇人を輩出する役目のある大学が考えていくべきことでもあるだろう。「女子学生が多いから仕方ない」³⁶⁾「女性の役は少ない」とあきらめるのではなく、「役を演じる」という教育的意味、役を演じることで学生達が「何を学ぶのか」ということについて今一度考え、「学生の性別」でチャンスの差が生じることはないようにするべきではないだろうか。ぜひ「未来の演劇界」を見据えた授業展開を考える手掛かりとして、海外のこの様な事例を参考にし各大学のカリキュラム編成にいかしていくことを提案する。

7. まとめ

以上、様々な角度から大学での専門科目としての演技の授業における「隠れたカリキュラム」に焦点を当てる形で考察を行い、問題提起及び、現在可能なまでの提案を述べてきた。「ジェンダー」という視点で、授業を見直すことは、決して規制をするものではなく、授業及び学生の学びをより深くするためであり、また単に「専門知識」「専門技術」に留まらず、「複眼的に」とらえ、そこに「問題」を見出し、自ら問い、そして答えを探するという能力の育成であるということが今回の主張のポイントである。そしてそれは女性、男性、そして様々なジェンダーアイデンティティーを持つ若者が未来の演劇人として舞台上、舞台裏で輝くためにどのような教育を今必要としているか、考えることでもある。

今後の研究課題としては、今回述べた教員側の「意識の変化」をどのように「具現化」できるかという視点で、海外の事例を参考にし、日本で実現可能なより具体的なカリキュラム案及び授業内容を提案していきたいと思う。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 25870742 の助成を受けたものである。

注

- 1) これ以降本論では、文字数の都合上「演技の授業」は大学教育における専門実技科目を示すこととする。
- 2) 松村悠実子「演技の授業におけるジェンダーの影響を考える—日常の『かわいい』キャラと演劇のキャラクターという演技の二重構造についての考察—」『玉川大学芸術学部研究紀要芸術研究2013』玉川大学芸術学部、5号、2014年、9-15頁
- 3) 松村悠実子「大学における専門科目としての演劇教育とジェンダー—先行研究分析とダンス教育におけるジェンダー研究との比較—」『玉川大学芸術学部研究紀要芸術研究2015』玉川大学芸術学部、7号、2016年、29-40頁
- 4) 2016年6月に、過去5年間に専門科目としての演技の授業又は、演劇公演の演出を担当し、演技指導をしたことのあるA大学教員6名に「演技の授業」に関する記入式のアンケート調査を直接、又はメールにて事前に了解を得て配布し、6名から回答を得た。
- 5) 2017年2月に過去5年間に専門科目としての演技の授業を担当したことのあるA大学教員2名（A、B）に対面での「演技の授業」に関するインタビューを行った。
- 6) インタビューにおいて、「ジェンダーという視点でご自身の授業を考えたとき、学生のジェンダーによって学びの不平等があると思いますか？」という質問に対し、Aは「(クラス内の男女の人数の違いから)例えば男子の役を男子にやらせてもらって、女子の役は女子になってしまった場合に、男子はシングルキャストだけど女子はトリプルキャストだったりした場合は、練習量に差が出るだろうなっていう。」と回答し、Bは、「自分の感覚としてはないかな。ないって言い切れないところが「ジェンダー」のミソだな。自分が考えているジェンダー・ジェンダーレスって、ジェンダーの平等っていうところと、学生が考えているジェンダーの不平等は違うと思う。(自分は不平等がないように授業をしている)つまり、(だがいざ学生の立場になってみると)出てくるかもしれない。」と回答している。
- 7) 「参考資料6 各専攻分野を通じて培う「学士力」—学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針—」、文部科学省、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/siryo/attach/1335215.htm、(参照日：2016年10月6日)

- 8) 稲邑恭子「ジェンダーフリーと『男女共同参画』～2年間の活動を振り返って」ジェンダーに敏感な学習を考える会編著『ジェンダーセンシティブからジェンダーフリーへ—ジェンダーに敏感な体験学習—』すずさわ書店、2001年、100-104頁
- 9) 前掲書、104頁
- 10) 加藤秀一「教育とジェンダー③隠れたカリキュラム 教育現場で暗黙のうちに伝えられるジェンダーの固定観念」加藤秀一・石田仁・海老原暁子『図解雑学ジェンダー』ナツメ社、2005年、40頁
- 11) 笹原恵「男の子はいつも優先されている？—学校の『かくれたカリキュラム』」天野正子・木村涼子編、『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社、2003年、84-101頁
- 12) 熊谷保宏「演劇の教科書あるいはカリキュラム問題について」『演劇総合研究』日本大学芸術学部、19号、2007年、1-8頁
- 13) 井谷恵子「学校体育に埋め込まれたジェンダー・ポリティクス」『現代スポーツ評論』33号、創文企画、2015年、73-80頁
- 14) 前掲書、74頁
- 15) 注13と同書、74頁
- 16) 井谷恵子「学校体育とジェンダー」木村涼子・古久保さくら編著『ジェンダーで考える教育の現在 フェミニズム教育学をめざして』解放出版社、2008年、52頁
- 17) インタビューにおいて、「戯曲はどのような基準で選んでいますか？」という質問に対し、Aは、「学生のレベルですね、まずは。また授業の趣旨に合っているかどうか。……ですね。あとは学生の勉強になるか、その学生にとって今やる必要があるかっていう観点で選びました。」と回答し、Bは「自分が扱いやすいっていうのがまず第1条件なんだけど、それは過去にやったことがあるっていうこともそうなんだけど、観たことがある、読んだことがある、戯曲はもうひとつはそれを上演の形態で想像したことがあるっていうのが条件に加わると思う。」と回答し、「ジェンダー」の視点があったかについては、言及はなかった。
- 18) 注11と同書
- 19) 前掲書、90頁
- 20) 松村和子「絵本にみるジェンダーは変わったか？」『日本保育学会第69回大会発表要旨集（2016）』保育学会、2016年、1242頁
- 21) 水本光美『ジェンダーから見た日本語教科書—日本女性像の昨日・今日・明日—』大学教育出版、2015年
- 22) 前掲書、5頁
- 23) 山田麗子「ジェンダー視点の学びをつくる：教室から生まれた中学歴史教科書『ともに学ぶ人間の歴史』」『女性&運動』新日本婦人の会、249号、2015年、30-33頁
- 24) インタビューでBは「男らしくするには、見せるにはどういうことなんですか？っていう。男らしく見せるっていうことをどうやってその自分をこう演出する際に使っていくんですか？っていう〈中略〉そこを読解、読み解いていくのが演技だからそこでざっくり「はい、こうです」っていうことが言えない。」とし、「男らしく」「女らしく」という指示はしないと述べていた。
- 25) 薬師実芳「LGBTの子どもも過ごしやすい学校について考える」『LGBT問題と教育現場—いま、わたしたちができること—』早稲田大学教育総合研究所監修、学文社、2015年、5-26頁
- 26) 前掲書、10頁
- 27) 前掲書、10-11頁
- 28) 前掲書、8-9頁
- 29) ジェンダーレス男子『THE PERFECT STYLE BOOK OF ジェンダーレス男子。』双葉社、2015年

- 30) 前掲書、4頁
- 31) 以下を参照。柴山麻妃「ジェンダーの政治学：アメリカにおけるフェミニズムとレズビアン演劇」『比較社会文化研究』九州大学、1巻、1997年、57-64頁
- 32) “Performing Gender and Sexuality” Theatre and Performance Studies, university of Warwick, http://www2.warwick.ac.uk/fac/arts/theatre_s/current/ug/intro/year_three/th332/ (参照日：2016年10月8日)
- 33) “Modules & structure” BA Drama & Theatre Arts, Goldsmith, University of London, <http://www.gold.ac.uk/ug/ba-drama-theatre-arts/> (参照日：2016年10月8日)
- 34) “Performance, Sexuality, Identity” Drama, School of English and Drama, Queen Mary, University of London, <http://www.sed.qmul.ac.uk/drama/undergraduate/modules/Modules/93634.html> (参照日：2016年10月8日)
- 35) “Young women play leading roles in life — so why not on stage?” The Guardian, <https://www.theguardian.com/stage/2015/jun/15/young-women-play-leading-roles-in-life-so-why-not-on-stage> (参照日：2016年10月6日)
- 36) アンケートで以下の質問をした：「今年度ご担当の「演技」又は「演技指導」をしている授業（実習での演出等）の学年、人数を教えてください。（今年度該当科目がない場合は直近の授業でお答えください。ご担当授業が4つ以上ある方は人数の多い方から4つお書きください）」※解答欄には、男性、女性それぞれの人数を回答する欄を設けた。その結果、演技実技系科目16クラス分の回答があり、1クラスあたりの男女の人数比は女子69.83%、男子30.17%と女子が多数であった。